

# 私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	131036	学校法人名	成城学園		
大学名	成城大学				
事業名	持続可能な相互包摂型社会の実現に向けた世界的グローバル研究拠点の確立と推進				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	4860人
参画組織	参画する学部・グローバル研究センター、民俗学研究所、経済研究所				
事業概要	<p>本事業は、成城大学が世界に先駆けて開始したグローバル研究の蓄積を基に、多様・多元・多層的な存在や価値観の併存を許容する相互包摂型社会のあり方を提示するとともに、それを支える人と社会の「しなやかさ」(resilience)の解明を目的とする。その成果を、本学の伝統とする高度教養教育に還元することで、来たるべき未来社会で活躍する「しなやか人材」の育成をも担う世界的なグローバル研究・教育拠点の確立と推進を目指す。</p>				
事業目的	<p>本事業は、成城大学が世界に先駆けて開始したグローバル研究の蓄積を基に、多様・多元・多層的な存在や価値観の併存を許す「相互包摂型社会」のあり方を提示するとともに、それを支える人と社会の「しなやかさ」(resilience)の解明を目的とする。また、その成果を本学が伝統とする高度教養教育に還元し、来たるべき未来社会においてしなやかに生き、活躍する「しなやか人材」の育成をも担う世界的なグローバル研究・教育拠点を確立し、その推進を目指す。</p> <p>グローバル化の潮流はとどまることを知らず、政治や経済、文化等のあらゆる領域で急激な再編が進んでいる。それに伴い、近年、世界的規模で社会的、文化的な不平等や格差の拡大・固定が顕在化しつつあり、その是正と改善の道筋が模索されている。例えば、欧州委員会は2014年「ホライズン2020」(Horizon 2020)と題する新たな科学技術・イノベーション政策を公表し、その中で、貧困や格差問題を是正した包摂型社会(inclusive society)の構築を目標に掲げ、それに向けた高度知識人材のあり方と教育法の検討を提言している。</p> <p>以上のような世界的な社会情勢と研究環境の変化の動向に鑑み、本事業は、現代社会が直面するさまざまな課題、とりわけグローバル化の質的・量的な増大に伴う社会的、文化的な不平等や格差の拡大・固定を是正し改善する取り組みの一環として相互包摂型社会を構想し、そうした社会の実現に必要なとされる新たな人間像を提示しようとするものである。</p> <p>複雑化を増す現代社会においては、世界的な課題が容易にローカル化すると同時に、ローカル固有の課題もまた容易にグローバル化する。この意味で、グローバル化(globalization)とローカル化(localization)は同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行、浸透、拡大するものであり、こうした状況はグローカル化(glocalization)と呼ぶべきである。欧米先進諸国を「中心」とするグローバル化が富の偏在や力の不均衡をもたらし、それらが世界のもっとも大きな不安定要素となっている現状を考えれば、非欧米先進諸国というローカル(「周縁」)を視野に入れたグローカルという発想はますます重要となる。そうした観点から、本学では、「グローバル」と「ローカル」の双方を視野に入れ、両者の相互作用の下で生成されるより望ましい社会を多様・多元・多層的な存在や価値観の併存を許容する相互包摂型社会と規定し、それを支える人と社会の実践原理を解明するための新たな研究を「グローカル研究」(glocal studies)として提起した。</p> <p>本学はグローカル研究を世界に先駆けて開始し、文部科学省「私立大学戦略的基盤形成支援事業」(研究拠点を形成する研究)の財政的補助を受け、これまでに2期、8年間にわたってグローカル研究プロジェクトを展開してきた。その結果、さまざまな領域におけるグローカル化の実態を実証的に明らかにするとともに、それらの理論的検討から、行き過ぎたグローバル化の是正と改善の糸口を提示することに貢献してきた。しかしながら、これまでのところ、より望ましい未来社会、あるいはそうした未来社会を支える新たな人間像を提示するまでには至っていない。</p> <p>以上のような経緯から、本事業は、グローバル化(グローカル化)がますます進行・浸透する未来社会において、6つの分野(「生活資源」と「文化資源」、「身体資源」、「人的資源」、「環境資源」、「金融資源」)を対象とするグローカル研究を通して、多様・多元・多層的な存在や価値観の併存を互いに許容する相互包摂型社会をより望ましい社会として構想し、提示する。同時に、そうした社会で柔軟に生きかつ活躍する新しい人間像を「しなやか人間」(「しなやか人材」)として提起する。最終的には、本事業の研究成果を教育実践へと活用する経路を明確化することで、研究と教育の両面から「グローカル研究」を世界的レベルで推進し、「しなやか人材」の育成を本学のブランディングとして確立することを目指す。</p>				

# 私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	131036	学校法人名	成城学園
大学名	成城大学		
事業名	持続可能な相互包摂型社会の実現に向けた世界的グローバル研究拠点の確立と推進		
事業成果	<p>本事業は成城大学が2016年度以来取り組んできた「グローバル研究」を成城大学を特色づける研究とすることを目的に構想されたものである。「グローバル研究」とはグローバル化が進む現代において、グローバルとローカルの関係に焦点を当てた研究であり、特に本事業においてはグローバル研究を通して、多様・多元・多層的な存在や価値観の併存を互いに許容する相互包摂型社会をより望ましい社会として、それを支える「しなやかさ」を提示し、そこで活躍する「しなやか人材」像を提示することを目的としたものである。</p> <p>1 グローバル研究の成果</p> <p>本事業の基盤であるグローバル研究については個別テーマを対象とした研究を進めるとともに、総括的な理論研究を行い、両者の応答の中で、グローバル研究の射程を明らかにしてきた。個別研究については、目的別にチームを構成して行った。各チームの内容と成果は以下の通りである。</p> <p>① 生活資源チーム:「生(life)」の在り様を取り巻く様々な要素に対して、社会学・民俗学的なアプローチを中心とした研究を行い、多様性と併存が期待されるグローバル社会における多層的な「生」の実像を描きだした。</p> <p>② 文化資源チーム:文化事象としての戦争記憶、博物館、放送(法制度)に着目し、元来「ローカルな」事象として存在・機能していたそれら事象が、グローバル化のなかで、いかなる変容を迫られ、またそれによってどのような新たな可能性を提示しうるかを検証した。</p> <p>③ 身体資源チーム:「身体資源」をキーワードにしなが、現代社会におけるローカルな現象とグローバルな現象の折衝、矛盾、交流、混淆が、身体を通じてどのように生じているのかに着目し、非物質的なものが流動的に世界をフローし、駆け巡る現代において、あえて生身の身体性や情動に注目し、「生きられたグローバルな経験」の分析をおこなった。</p> <p>④ 人的資源チーム:移民に焦点を当て、送り出し国、受け入れ国等の間に見られる接触や相互交渉過程、「共生」等の実態を、グローバル研究の観点から実証的に明らかにすることを試み、当事者すべてが多様、多層、多元的なあり方や考え方を受容、尊重して共生する相互包摂型社会を構想し、その実現に向けた理論と方法を検討、提示することを試みた。</p> <p>⑤ 環境資源チーム:いわゆる自然環境だけでなく、主体に直接間接にかかわるモノと環境を広く捉えた上で(例えば人的環境も含まれる)、環境資源の視角からグローバル化現象とそれに伴う諸格差拡大の動態と、その動態に見られる権力勾配を分析し、その分析を踏まえて環境資源チームから相互包摂型社会の構想を提示することを意図してきた。</p> <p>⑥ 金融資源チーム:グローバル化を背景にあるいはそれを前提にしなが、金融領域で現実には起きている問題。これを議論分析した。特にグローバルとローカルの2つの原理の対立に注目して、金融領域でこの対立が表面化している問題について検討し、グローバルなものやローカルなものが交わり相互作用が生じた場合、調和的で安定した状態が生まれにくい状況を明らかにした。</p> <p>以上の個別研究により明らかになったことは、グローバル化が進展する中で、「ローカル」には多様化・複雑化が進んでおり、しかも両者の関係性は絶えず変化していることである。</p> <p>以上の成果から、グローバル研究においては多様で柔軟な視点が必要となることが明確になった。例えばグローバル化のなかでの中心と周縁の関係、グローバル化のなかで多文化するローカルのあり方、さらにはこれまでの場所性とは異なるサイバー空間におけるローカルのあり方、などが考えられ、グローバルやローカルを固定的な存在とするのではなく、絶えず変化する現象として捉え、それを可視化していくことがグローバル研究の射程であり、今後グローバル化が進展する世界において、その研究の可能性にも広がりがあることが明確になった。</p> <p>以上の研究により本研究が目指した多様・多元・多層的な存在や価値観の併存を互いに許容する「相互包摂型社会」を支える社会と人の「しなやかさ」とは、絶えず変化するグローバルとローカルの関係の中で、それを認識して対応することに他ならないと考える。</p> <p>このように、本事業によりグローバル研究を確立することができたと考えており、成城大学を特色づける研究として今後も継続するための基盤を構築できたと認識している。</p> <p>(2) 研究成果の社会発信</p> <p>研究成果の発信としては、まずグローバル研究の全体像を示すものとして「グローバル研究の理論と実践」(東信堂、2020年)を刊行し、これまでの研究を総括するとともに、今後の可能性を提示した。このほか事業期間中の成果の公開として、①刊行物16冊、②シンポジウム・ワークショップの開催40回、を数えた。このような成果の発信により、「グローバル研究」の認知が進んだと考えられ、グローバル研究を成城大学を特色づける研究とするという当初の目的は達成されたと考えられる。なお、本事業は2020年度も継続しており、その一環として書籍企画4件が進行しており、年度末刊行が予定されている。</p>		

<p>今後の事業成果の 活用・展開</p>	<p>本事業は「グローバル研究」を成城大学を特色づける研究として確立することを目的に構想されたものである。上記「研究成果や特色」でも記載したが、4年間におよぶ研究により、グローバル研究の射程と可能性を理論的に明示し、さらに個別的な事象についての研究実践により、その有効性も明らかにすることができたことで基盤を構築することができ、成城大学を特色づける研究としての地位も確立できたと考えている。以上の成果を受けての、今後の活用・展開の方向性は以下の通りである。</p> <p>1 グローバル研究のさらなる推進 本事業により確立した「グローバル研究」を今後とも継続して推進し、成城大学独自の研究分野としてのさらなる深化を目指す。グローバル研究の中核であるグローバル研究センターについては大学中期計画にも記載されており、今後も活動が継続される予定である。</p> <p>2 対外交流 本事業により、国外との提携が進んでいる。この成果を活用し、成城大学の対外交流の一翼を担えるように展開を進める。</p> <p>3 外部への発信 本授業期間に公開された出版物は16点、公開シンポジウムは40回に達している。今後も積極的に対外発信を継続する予定である</p> <p>4 教育への適応 本事業の目的である「しなやか人材」は汎用的なものであり、これを大学としての教育に取り入れる予定である。今後はグローバル研究の含意を踏まえた能力構成のブレークダウンによるルーブリック作成などが課題となる。</p>
---------------------------	---